

オマーンに対するアルハッジージュの最初の総督

(P.192) マジャーアがオマーンを制圧した時に、彼の同輩であるアブドゥルラハマーン・ブン・スレイマーンが彼と共にあり、彼を支持し、そして制止もした。

そしてオマーンは彼の兄弟のアルカーシムを彼の非道な軍隊と共に根絶した。そして前述のマジャーアを彼の第1軍、第2軍と共に粉砕した。そして第3軍は勝利した。(これは)オマーンにおける状況(が寄与した)と描写されている。

そしてオマーンに対するアルハッジージュの主権が、サイドとスレイマーンがアフリカのザンジ(バル)の地へと出て行った事により具現化した。そしてオマーンを征服した軍靴がオマーンの人々の尊厳を踏みにじった。

アルハッジージュは傲慢な彼の側近の一人であるアルハヤール・ブン・スブラ・アルマジャーシーをオマーンの総督に任じた。そして前述のアルマジャーシーはオマーンの総督としてアブドゥルマリク・ブン・マルワーンが、17人の子供達を残して、ヘジラ暦86年シャワール月に死去するまで、彼(アブドゥルマリク)の生涯に亘って留まった。

そして彼の死後、彼の息子のアルワリードが諸事を司った。それからアルハッジージュが死去し、そしてアルワリードは、ヤジード・ブン・アビー・ムスリムをイラク総督に任じた。

そしてその当時オマーンはイラクの諸州の一つであった。つまりそこをヤジード・サイフ・ブン・アルハーニー・アルハムザーニーが統治した。そして彼は、アルワリードが(ヘジラ暦)96年ジュマダー・アルアーヒラ月15日に死去するまで、そこにおける諸事を行った。つまり彼のカリフ職在任期間は10年であった。そしてアルハーニー・アルハムザーニーの息子、彼がイラク総督ヤジード・ブン・アビー・ムスリムを通じてオマーンの総督となった。

アルワリードの後、彼の兄弟のスレイマーン・ブン・アブドルマリクが後継者としてカリフ職に就任した時に、彼はサイフ・ブン・アルハーニーをオマーンの(総督)から解任した。そして彼の地にサーリフ・ブン・アブドゥルラハマーン・ブン・カイスアッリーシーを総督に任じた。アッリーシー総督は、党派的動乱の最中にオマーンを巡り歩いた。(カリフ)スレイマーン・ブン・アブドルマリクは彼をそこ(オマーン)から解任を考慮した。恐らく彼は州の諸事を運営するのに優れていないと彼の事を見做したのであろう。そして彼の地の最初の総督をそれ(オマーンの行政)の行使者として復帰させた。個々の時代には政策があり、個々には事象の改善がある。そして人々の知的能力は状況が様々である。

そして(カリフ)スレイマーンはサーリフ・ブン・アブドゥルラハマーン・

ブン・カイスアッリーシーを、総督を指導し、彼の動静を監視する者とした。そしてオマーンにおいてこれらの総督達が、交代しながら一時代が過ぎて行った。

そしてこれはヤジード・イブン・アルムフラブ・ブン・アビーサフラがイラクとホラーサーンの総督となるまでの事であった。ヤジード・イブン・アルムフラブ・ブン・アビーサフラはオマーンの出自であった。(P.193)そして彼はそこに郷愁と呻吟を持っていた。即ちそこは彼の故郷であり、そしてアズド族と言う彼の部族の故郷であったからである。そしてそれ故に、彼は彼の兄弟であるジャードをそこの(総督として)任命した。それから彼はオマーンの総督として、そこの人々に善行を成し、彼等の元で愛され、そして彼等に服従され続けた。彼はそこにスレイマーン・ブン・アブドルマリクが死去するまで留まった。

そして「正しき僕」オマル・ブン・アブドルアジーズ、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼はスレイマーン・ブン・アブドルマリクが死去した日に、彼の後継者としてカリフ職を継いだ。そしてその事は彼の永遠の善行の一つと考慮される。つまりその事はヘジラ暦 98 年サファル月 10 日のことであった。そして 99 年とも言われている。

それからここにおいて公正さの光が始まり、不義の闇が消え始めた様に思われた。そして時の善き事柄の中にはオマル・ブン・アブドルアジーズのカリフ職(就任)があった。そして善行には、悪行と同じ様に様々な影響がある。

そしてこの期間に宗教的宗派の役割があった。そしてイバーディー派の人々は、真理から彼等の幸運を得ていた。そしてイスラーム世界においては彼等には、それがどの様なものであれ、彼等以外の者達に大事が知られる前に、火よりも明らかな知識に対する立脚点があった。

つまりイバーディー派の人々は律法の文言集を書き記し、そして正しい信仰を彼等は証明したのであった。そしてウマイヤ家の一族の暴虐的な総督達に反して、真理の標榜を立ち上げ、そして宗教の印を設定し、イスラーム教徒達の為に基盤を確立した。

そのアルハッジャージュやイスラーム教徒達を抑圧し宗教の行くべき道を狭くした彼と同類の頑迷な者達の暗黒の時代に、シャーフィー派、ハンバリー派、マーリキー派、ハナフィー派(等の学派)がイスラームに存在する前の時代において、彼等即ちイバーディー派の人々は、信仰者達の(法の)源であり源泉であった。同様に我々は固い絆の中でそれを明らかにした。彼(神)の恩恵によって正しきことが成される神を称賛せよ。

オマーンの人々の宗教学派

(P.194)知るが良い。我々のこの歴史はオマーンとその状況の中でそれと係りを持つ諸事件に関するものであったとき、我々はこの我々の歴史がオマーンの全ての諸事を取り扱うために、オマーンの人々の宗教学派について言及することを考慮したのである。

知るがよい。オマーンの人々の学派は、オマーン、古い時代のハドラマウトとイエメン、そして減退するまでのイラクとエジプト、それから大部分のマグレブ地方で知られていたイバード派である。そして前の時代のヌフーサやトリポリやアルジェリア、ミーザーブに至るまで広がっていた。

そして真理の人々の間におけるイバード派の信仰理念の広がり、有名な事であり表舞台に現れた事であり、否定しようとする者でも否定出来ず、中傷する者でも中傷出来ないのである。

ハワーリジュ派は異端である過激なイバード派の人々から出て来た。そして彼等は醜い彼等の言動を生み出し、そしてそれをイスラーム教徒達の会合へと持ち込んだのであった。人々は彼等に対してそれを否定して、そして彼等に対してそれを拒絶した。それから人々は彼等を遠ざけ、そして人々の会合から遠のけ、そして彼等の言動から解放された。そしてこれらの事をもって後の世代の人々は、彼等にハワーリジュ（出て行った人々）と言う名を付けたのである。そしてこれらの事をもって人々は彼等に対して、共同体が彼等に嫌悪を抱いたことで、悪行のレッテルを貼った。

我々が述べたことの信憑性は、人々の貴重な著作や明らかに正しい彼等の書籍群の中にある。そして人々の有名で優越した言葉とは、ハワーリジュ派は道の間違えそして隘路を歩み、そして個人的解釈によって、神への唯一信仰の人々に多神教信仰を生み出したのである。

アルムフタール（選ばれし者）の共同体は彼等に離別し、彼等に道を誤らせ、そして彼等を戒律を犯した者と断罪した。

つまり（上記の詩は）イバード派に対するものではなく、ハワーリジュ派に対するものである。つまりイバード派は、彼等の行く道は、誠実さと敬虔においては、アブー・バクルの宗派である。そして彼等の行く道は、厳格さと正しき導きにおいては、オマル・ブン・アルハッターブの宗派である。そして彼等の信仰は、宗教においては、予言者ムハンマド、彼と彼の一族に神が祝福と平安を与え給わんことを、彼の信仰であり、宗教において誤魔化しないものであり、イスラーム教徒達に対して敵対するものではなく、信者達と離別するもの

でもない。彼等は彼等の主を完全な彼の属性で描写し、そして優れた彼の形容で彼を描き、そして全ての欠損から彼を無縁としているのである。(P.195)そして彼等は聖典とスンナ（ムハンマドの奨励行為）に対して法的容赦のない依拠の仕方ですべて依拠しているのである。そして彼等は全意見一致で語り、そしてその必要とするものを伴い活動する。そしてそれに関して意見の相違に対しての見解を取り入れる。そしてたとえ誰であろうが、そしてたとえどんなものであろうが、イスラーム教徒達の行く道と相反する1個たりとも満足はしないのである

つまりイスラーム教徒達は、アブー・バクル、彼を神が嘉し給わんことを、彼が逝去し神に会うまで、彼に忠誠を誓った。それからオマル・ブン・アルハッターブ、彼を神が嘉し給わんことを、彼の下に集まり、彼に寄り添い、そして彼を支援し、そして彼を勝利させた。そして彼等は、彼の日々が尽き果てるまで、彼が真理と共に居たが故に、彼と共にあった。それからイスラーム教徒達のイジュティハード（法的解釈への努力）と宗教的諸事や信仰者達の行く道を支援する義務に対する見解の後で、オスマーン・ブン・アッファーンに忠誠を誓った。

そして彼等は彼に対して約束と誓いを立てた。そして全ての正しい確認でその問題を確認した。力満ち偉大な神の宗教に対するイジュティハードの為に、そしてイスラーム教の諸権利を遂行する為に、そして共同体の利益を保護するためにであった。

オスマーンはイスラームの人々の中でも名士の出自であり、高貴な状況の高潔の士であり、高位な美德の性格が広がっていた人物であり、多くの大衆に愛された人であった。そして言葉に従って、話を受け入れられた。

そして人々は彼の宗教において人々が否認することを彼に対して準備した事もなかったのである。

そして既に人々は彼の後継に関しては、完全なイジュティハードで臨んだ。即ちその立場はイジュティハードの立ち位置であり、そして正しき道を行く者と更に正しき道を行く者の見解であった。

それから人々は彼にその全ての後で彼に忠誠を誓ったのである。人々にはこれから生じる事に関して不可視を知るということはなかったのである。つまりもし彼が事を上手くなせば、それは彼等の思うところであり、それから彼等の希望も生じる。そして彼が真理から逸れ、道から逸脱した場合には、彼にはイマーム職での指導力がないのである。

そして人々はペルシャ王やローマ皇帝と衝突し、そして彼等に玉座から引き離した。つまり如何にして彼等の中の或る男を、彼等は彼等の宗教のために彼

を擁立し、そして彼等に対する首長としたか、彼等に不幸が降りかからないために。

そして彼がもし神に対して正当な道を歩まず、共同体の義務を果たさなければ、真理を歪曲してしまうであろう。真理は付き従う最も価値あるもので、真理の後に来るものは、迷い以外にはない。

つまりオスマーンは彼のカリフ職当初から6年間正しき道を歩んだ。そして何ものも彼に敵対するものはなかった。つまり彼は彼の2人の教友達（アブー・バクルとオマル・ブン・アルハッターブ）の道に則っていたのである。そしてイスラーム教徒全員は彼の旗の下にいて、そして彼の指示に応じていたのである。（それは）その後彼が態度を変え、方針を替えるまでの事であった。

と言う訳で人々は彼に対して彼の2人の教友達の行く道を彼が変えてしまった事を否認した。つまり彼等は、当初恐らく、彼が不注意であるならば、気を付けるように、もしくは無知であるならば、知るように、と苦言を呈したのである。（P.196）そして彼等は一時期彼と共に歩んだ。つまり彼等は彼が（正しき道を歩んだ元の状態に）戻ることを実現できなかった。そして彼等は、彼等が否認した状態に彼が居続けていること以外、彼に関して理解していなかった。

そしてアリーは、彼がそれ（イマーム職）に対しての資格があると見做していたので、それに対して熱意があったのでであろう。つまりアリー・ブン・アビーターリブは、正義の指導者が立ち上がるが如く立ち上がったのである。そして聖クルアーンの命令によって行動した。そして聖俗の世にいる者達の中で虚偽の者達は彼を恐れた。そしてそれ（現世）に襲い掛かった。

そして彼（アリー）はオスマーンの血を求めて立ち上がった騒乱の人々と戦った。何故ならば人々の元に身を隠していた者達（騒乱の人々）と彼が戦った為であった。そしてとうとう彼は彼等の中の何千人を殺害した。そして彼の敬虔な男達の隊列、そしてムハージル達やアンサール達の中の彼の教友達、そして善行をもって彼等に付き従う者達で（敵対者達の）隊列を打ち破った。

とうとう彼（アリー）に対して現世に目的を持った或る人々が混乱を引き起こした。（それは）彼等が彼をズー・アルフィカール（アリーの所持する名刀の名前）の同盟者（アリーが武力を持つ者の意味）であると見做し、そして個々の暴君に対して公正さに親しむ者であると見做した時の事であった。そしてその時に彼等は彼に対して陰謀を張り巡らせた。

（彼等は思った）正にこの男は我々にとって真理の何物も見えてとれないのである。そして我々が希求するものへと導かれもしない。さあ、我々は彼に対して罟を仕掛けようではないか。

つまり彼等は彼に対して彼の血をもって以外にはそこから逃れられない網を編んだのであった。硬い結び目を我々は解き明かし、そしてアリーの真実と彼

の一族の目的を我々は明らかにした様に。

そして彼等は彼を様々な側面から支配者認定の問題において彼をだました。最初にそれを受け入れる事。即ち彼等は彼にその責任を負わせた。つまり彼は不承不承受け入れたのである。

衰退していくアリー・ブン・アリー・ターリーブの国家はこの事によって後退した。そしてそれに耐えていた支柱が壊れた。そして屋台骨で取り囲まれていた王宮は崩壊した。それから彼等は互いに首を刎ねあう状況に戻ってしまった。そして亀裂に侵入し分離を続けた。

統治者任命の問題に関して、悪魔はイスラーム教徒達の中に付け入る入り口を見出した。つまりそれに関して巷間で様々な事が言われた。災厄が長引き、そして陰謀が生み出された。イマームに対して横柄な態度を取りながら、彼等の首領者達が、そして彼等の中の個々の者達が自らの望の究極のものを伝える為に、彼と対立する者達に与しながら、金銭の要求を持ち出した。

つまり或るグループは彼の統治者任命を（一般的な）広範囲なものに見做していた。そして或る者達は義務と見做していたし、そして義務でも許可されたものでもないに見做しているグループもあった。

そしてそれによって、イスラーム教徒達の杖にひびが入った。根本はイマームの敵対者達を上回る為に彼が設定した事であった。つまり彼に従っていた者達が、そして国家の軍事力を担う者達が彼から離脱した。

(P.197)夜の修道士達は昼の獅子である。（夜にも信仰心を持ち続ける者達は、昼間には更に力強さを増す、と言う意味）彼等は現実に満足していなかった。そしてイマームは彼等に耳を貸さなかった。そして彼等に対して彼等が要求したものを考慮しなかった。と言う訳で彼等は彼を離れて脇へと逸れて行った。つまり無知なる者が彼等を恐れ、抑圧者が彼等を畏怖したのであった。

そして彼等の襲撃を恐れる者が彼等の殺害へと傾いて行ったのである。つまり彼等は彼等が創造した罫と彼等が織りなした陰謀によって、イマームに対して彼等を殺害する事へと誘うのであった。

そして既に力強く威厳のある神は、彼の力強い聖典において、前述の問題に関して既に裁定を下されていた。その様な問題の裁定はイスラーム教徒達の誰一人にももたらされてことはなかった。つまり噂や分裂、論争が湧きたったのであった。

と言う訳で或る者達は、問題に関する神の裁定は明白であり、そして彼等の意見によるとイマームはそれに関して裁定する能力がないと見做した。そしてそれ（問題）は正に転落した者達の手が演じた諸問題の中で最も重要なものの1つであった。

裁判所に上申する為の身の潔白を証明するために、偽造と逸脱でそれ（問題）

の真相を歪めてしまったのである。その事は統治者任命を否認する者達は、次の言葉を言ったのである。「裁定は神による以外にはない」。

彼等は圧政のグループとの闘いの問題以外を意味してはいなかった。何故ならば神はその問題の裁定を彼の下僕達の為に設定した訳ではなく、力強く威厳のある御方自身と（下僕達と）の間に設定したのであった。そして既にイスラーム教徒達のイマームに面と向かって武器を取った者達は、圧政のグループであったことが確定した。そしてアンマール・ブン・ヤーセル、彼を神が嘉し給わんことを、彼の殺害の後、嫌疑と疑惑があった者に対しての疑惑が残り続けた。（それは預言者）彼に平安があらんことを、彼が彼について語った為であった。「圧政的なグループが汝を殺害する」。

イスラーム教徒達の誰一人として、この返答もしくは上申に関するこのハディースに出会ったことはないしかしながら人々はそれを証明し、そしてそれを信じた。そして教友達の中の学識者達がそれを語った。つまりそれによって、アンマール殺害の後、（信仰心の）弱き者達の中で疑惑が持たれた者に対して、嫌疑が残り続けた。

つまり使徒、彼と彼の一族に神が祝福と平安を与え給わんことを、彼がそのことに関して、疑いもなく圧政者がアンマールを殺害したと公表したのであった。つまりこの事によって次の事が明白になった。イマームに敵対する者達は2つの隊列があり、（ある隊列は）聖典とスンナの裁定によって彼に圧迫を加える者達、（そして別の隊列は）彼がかつてこの様に統治の座に就いたことが許されない事である、と言う（者達であった）

つまり彼を否認する者達は、神以外には裁定は帰属しないと言うのであった。即ち神が裁定を下すことに関しては、その裁定と相反する裁定を下すことは正しくないのである。さもなければ、それは力強く威厳のある彼（神）の裁定に対する離脱であり、神は彼（人間）の裁定に沿わない裁定を下しているという事である。

そして既にスンナは聖典の裁定を確証していた。しかしながら高慢な者達は真実をその面前から取り去り、(P.198)そしてその典拠以外にそれ（真実）を記載する事以外を拒否した。

つまり彼等は、事実がこれと反しているのに、この文章を一般的なものとしたのだった。そして裁定者達が占めている個々の地域で、イマーム達を擁立したと言う事実にもかかわらず、裁定は神以外には帰属しない、と言う彼等の言葉で、カリフ職の英雄を裁定する者達は望んでいる、と彼等はまた主張した。碩学アブー・イスハーク・アルイトフィシーは述べているが、彼等と共にアルハサンアルバスリーとメディーナの学者であったマーリク・ブン・アナスは、統治者任命を否認した。そしてどうようにアルムバツリドが彼の書「アルカー

ミル」の中でも言及し、そしてその事について「イスラームの黎明」においても述べている。(2017/9/26、P.198、上から1段落目まで)